自由からの逃走

ERICH FROMM/著　　日高六郎/訳

東京創元社発行

　　　　　報告　松本倫明

目次

序章

　本書の目的

　本書の主題

　補足　全体主義とは

一章

　自由の獲得と放棄

　心理学の必要

　適応とは

　他者とつながりたいという欲求—孤独の回避

　自由を得た後

~序文~

本書の目的

フロムが『自由からの逃走』で扱う範囲は以下の通りである

|  |
| --- |
| 1. 近代人の性格構造についての問題 2. 心理的要因と社会的要因との交互作用の問題　　(P3L1) |

彼がこの分野を取り扱うのは、人間が近代文化の中で手にした、個性と人格の独自性に、危険が及んでいるからである。すなわち、人がますます「たった一人の自分」を失い、全体主義に向かう事が、彼の問題意識である。彼は全体主義に打ち勝つ為には、なぜ人が自由を放棄するのかを理解しないといけないと主張する。この理解が本書の目的である。

本書の主題

彼が自由に関して設定したテーマは以下の通りである。

|  |
| --- |
| 個人と社会の絆からの自由は、束縛からの解放を意味するが、個人の知識や感情、感覚を表現する自由につながる事はない。 |
| 自由によって独立した個人は、同時に孤独でもある。その個人は不安を抱え無力な者と化した。 |
| 束縛からの解放は個人にとって重荷となる。そこで彼が取る行為は二つの内のいずれか。服従(≒自由の放棄)もしくは完全な自由の実現。 |

補足　全体主義とは

個人の利益よりも全体の利益が優先するという思想。ドイツのナチズムやイタリアのファシズム、大日本帝国の国家総動員法が挙げられる。

ハンナ・アーレントは『全体主義の起源』で、都合良く作られた理論を宣伝し、人々の論理的、倫理的一貫性を損ない、彼らを思考停止に追いやる事で、全体主義が広がる事を指摘する。

* ファシズム…ナショナリズムに基づいた集団主義。元はイタリアの全体主義思想をさす用語だが、ヒトラーのナチス等にも幅広く使われている。
* ナショナリズム…政治的共同体内で同一文化の共有、複数文化の同化を目指す。
* 本書とは関係ないが……全体主義の批判をすれば、日本やドイツに対する批判のようにも感じられるが、国際社会において、を強行する米国もろくなものではない。

例えば、米国は、イラクで初めて女性に教育の権利を認めたフセイン政権を崩壊させ、女性からその権利を奪ったのである。

~一章~　自由—心理学的問題か？

自由の獲得と放棄

近代の欧米の歴史は、政治的・経済的・精神的な自由を目指す努力に集中されている。諸々の人権宣言や独立宣言は王制の圧迫等から解放され、自由を手に入れた歴史である。自由を得る為の戦いは何度も繰り返され、最終的に自由の獲得が勝利すると考えられた。

しかしその自由の獲得を一切否定するような組織が誕生する。その組織の本質は「すべてのひとびとが、自分で支配する事のできない権威へ服従する(P11L8)」事であった。人々は自由から逃れようとしたのである。

心理学の必要

人々が自由を捨てて服従した組織は、ファシズムの思想をもつ。なぜ弱者を虐げるファシズムに憧れを持つ事があったか、理解するには心理学的な分析が不可欠である。この分析は、心理学的要素の中でも特に、無意識的な力の働きに基づく。

但し、心理学の父たるフロイトが個人の内面の欲求から分析を行なったのに対し、本書では「個人の外界にたいする特殊な関係(P19L8)とする。

適応とは

フロムが分析を進める上で適応という概念が検討される。適応には静的適応と動的適応の二つの分類がある。

静的適応とは、単に外界からの要求を受け入れる事であり、個人の内面には何の変化も来さない。一方、動的適応は環境の要求に適応した結果、その個人の内面に影響を与えるような適応を指す。この適応により、「文化的に価値のある(P17)」結果も、「人間の発達にとって有害な(P23)」結果も生じると思われる(フロムが動的適応を説明する上で直接明示している結果は悪影響のみ)。

他者とつながりたいという欲求—孤独の回避

本書で重要となる要求が、「外界と関係を結ぼうとする要求、孤独を避けようとする要求(P25L15)」である。外界との関係とは、理想や価値を共有しているという感覚を持つ事を指し、そのような感覚を喪失している状態が精神的孤独である。この孤独は堪え難いもので、人は孤独からの逃げ場を求める。

* 本書の主要テーマではないが、精神的孤独が恐ろしいものとなる理由は以下の通りである。

|  |
| --- |
| 協同なしには生きる事ができない(P27L13) |
| どこかに帰属しない限り、(中略)個人的な無意味さに押しつぶされてしまう(P28L10~12) |

自由を得た後

|  |
| --- |
| 人間が自由となればなるほど、そしてまたかれがますます「個人」となればなるほど、人間に残された道は、愛や生産的な仕事の自発性のなかで外界と結ばれるか、でなければ、自由や個人的自我の統一性を破壊するような絆によって一種の安定感を求めるか、どちらかだ(P29L12~15) |

人間は自由を獲得し、また確固たる一人の人間となっていくにつれて、孤独を深めていく。この孤独から逃れる術は２通りである。

第一に、愛情や文化的価値の新たな創造である。

第二に、自由を放棄し、自己の独自性を放棄する為に、何らかの破壊的な組織に所属する事である。